

ミカ書2章6-7節 「主の霊を制限する者」

1A 戯言を言っている者 6

1B 「戯言を言うな」という戯言

2B 辱め

2A 御霊を抑える者たち 7

1B ヤコブの家の名

2B 自分の欲するままに主の霊に従わせる者

3B 「主の御業」と言われるもの

3A 正しく歩む者への益 7

本文

ミカ書 2 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、前回でヨナ書まで来ました。午後礼拝でミカ書 1-4 章(もしくは、1-3 章)を一節ずつ見ていきたいと思います。今朝は 2 章 6-7 節に注目します。「**「たわごとを言うな。」**と言って、彼らはたわごとを言っている。そんなたわごとを言ってはならない。恥を避けることはできない。ヤコブの家がそんなことを言われてよいものか。主がこれをがまんされるだろうか。これは主のみわざだろうか。私のことばは、**正しく歩む者に益とならないだろうか。」**

ミカは、主にユダ王国に対して預言していた人です。1 章 1 節に、「ユダの王ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの時代に、モレシエテ人ミカにあった主のことば。これは彼がサマリヤとエルサレムについて見た幻である。」とあります。北イスラエルのサマリヤに対して預言もしましたが、基本的に、サマリヤが行っていた罪を、あなたがたエルサレムも行なっているではないか?と叱責しています。その中身はと言いますと、2 章から始まっていますが、裕福な者たちが、人々の持っていた土地をかすめ取り、家々を取り上げているというものです。相続地を取った、とあります。かつてアハブ王が、ナボテのぶどう畑を、彼を殺すことによって奪い取りましたが、そのように神が人に割り当てた土地を奪い取って、私腹を肥やしていました。また、貧しく、持っている者と言えば着ている物しかないという人々からさらにその上着をはぎ取るというようなひどいことをしていました。しかし、そのようなことをしている者たちに対して、「あなたがたが飲んで**いるぶどう酒や強い酒について主からの言葉があります。」**と**いって、**そういった生活を主の名を使って擁護するような、偽りの預言者たちがいました。

そういった悪に対して、主が「あなたがたの割り当て地は、すっかり取り替えられてしまう。」とミカは預言したのです。後にバビロンによってユダの地が奪い取られますが、そのことによって、彼らは主からの報いを受けることをミカは伝えました。

1A 戯言を言っている者 6

1B 「戯言を言うな」という戯言

そこで、「**たわごとを言うな。**」と言ったのが、その言葉を聞いていた人々です。あまりにも酷い言葉であり、「冗談も休み休みに言え」というところです。我々に恥をもたらしている、辱めるような言葉だ、と強く反発しています。ここの「戯言」は、「説教」とも訳すことのできる言葉ですが、そんな説教をするのは止めなさい、と強く反発しているのです。自分たちの生命線ともいえる、土地の所有を奪い取るなど言うような、酷い言葉が二度と語るな、ということでもあります。

要は、自分の大切にしているものが失われるなどということは、決して神の預言ではない、そんなものは福音ではない、と言っています。けれども、良い知らせ、福音というのは、神のいのちにあずかることであって、それを妨げるものであれば、それを退けることさえ必要とされます。イエス様は、「マルコ 8:35-37 いのちを救おうとする者はそれを失い、わたしと福音のためにいのちを失う者はそれを救うのです。人は、たとえ全世界を得ても、いのちを損じたら、何の得がありません。自分のいのちを買い戻すために、人はいったい何を差し出すことができるでしょう。」と言われました。神のいのちにあずかるために、自分の核になっているもの、自分というものを崩していただいて、本来の、神にある自分の姿に変えていただくのが、神の良き知らせ、福音です。そして、人には隠されたことさえも神は知っておられて、そこに光が与えられて、神の前で悔い改めることが、福音の始まりです。「ローマ 2:16 私の福音によれば、神がキリスト・イエスによって人々の隠れたことをさばかれる日に、行われるのです。」とパウロは言いました。

しかし、彼らは、自分たちの聞きたいことを聞きたいと思っていました。自分を根底から変えられることを激しく拒みました。そして、そもそもやってはいけないことをしていたのです。彼ら自身が、神の語る言葉そのものを変えていきたい、自分たちの聞きたいように変えようとしていたのです。神のことばが自分たちを支配するのではなく、自分たちで神のことばを支配しようとしていました。

2B 辱め

そして彼らは、「主が語られるのは、我々に恥をもたらすものか？」と強く反発しています。罪の自覚が与えられること、耳に痛いこと、心が突き刺されるような言葉、こういったものは要らないと言っています。自分のしていることは是認してもらいたいのです、肯定してもらいたいのです。そして、それが罪であるということを決して言われたくない、あなたがたは偏狭になっていると言っています。しかし、聖霊の業はそんなものではありません。イエス様は、もうひとりの助け主、聖い神の霊について、「その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。(ヨハネ 16:8)」と言われました。聖霊は、誤りを認めさせるためにこの世に遣わされているのですから、当然ながら罪の自覚が与えられるものなのです。けれども、その御霊の働きさえも、自分のプライド、高ぶりによって拒んでしまいます。自分たちに恥をもたらす、辱められるようなものだと思うのです。

2A 御霊を抑える者たち 7

1B ヤコブの家の名

そして7節、「ヤコブの家がそんなことを言われてよいものか。」とあります。彼らの言っているのが、本当にヤコブの家の姿なのか？ヤコブの家がそんなことを言われても良いのか？ということです。神のことばが語られているのに、それを「戯言を言うのをやめろ」と言われるのが、本当にヤコブの家なのか？という問いかけです。父祖ヤコブは、神のことばに対してどのような態度をとったでしょうか？彼は、貪欲なほどに神の約束を待ち望んでいました。彼は大きな失敗を幾度となく犯してしまいましたが、神が言われたことを疑うことは一切ありませんでした。彼は神を信頼し、それが自分の太ももの関節が外されたとしても、それでも神の側につくことを選びました。ヤコブの家であれば、そのような姿であってこそ、その名にふさわしいものです。ところが、当時の人々はその正反対のことを行なっていました。

クリスチャン、キリスト者と呼ばれるのは、いかがでしょうか？昔の日本でいうなら、それは「耶蘇」と呼ばれているようなものです。嘲ることばでありました。けれども、どのように嘲られていたか重要です。「キリストみたいだな、あの人たち」ということです。キリストが歩まれたように、自分たちも歩んでいたから、それでキリスト者と言われていたのです。弟子たちが、日頃から主のところに行き、その方を見、その方から聞き、その命令に従ったように、私たちは御霊の助けによって、イエス様のところに行き、イエス様を見、この方から聞いて、その言われたことを行なっていきます。罪を犯して、それで自分はキリスト者と名乗ることはできません。「【第3版】Iヨハ 3:6 だれでもキリストのうちにとどまる者は、罪を犯しません。罪を犯す者はだれも、キリストを見てもいないし、知ってもいないのです。」

2B 自分の欲するままに主の霊を従わせる者

そして、「主がこれをがまんされるだろうか。」とあります。ここには、ヘブル語で「霊」を表す言葉があります。ですから、「主の霊が、これをがまんされるだろうか？」と訳すことができます。あるいは、ここの「がまん」は、「短い」という意味合いがあり、「主の霊が、限界があって何もすることができない、人々を変えて義の中を歩むようにさせる力はないのだろうか？」という意味合いがあります。彼らの頭の中では、「主の霊が、我々のしていることをそのように制限を設けているような方ではない、もっと心の広い方なのだ。」というものであったでしょう。けれども、真の預言者たちは、「あなたがたこそ、主の御霊に制限を設けているのだ。あなたがたが罪の中を歩んでいるが、御霊がその縛りから解放させることができになるのに、あなたはその導きを拒んで、御霊の働きを制限しているのだ。」ということになります。

私たちが、どれだけ真面目に、御霊の働きが今日にもあるのだということを信じているでしょうか？パウロは十字架につけられたキリストを宣べ伝えていましたが、「1コリント 2:4 私のことばと私の宣教とは、説得力のある知恵のことばによって行なわれたものではなく、御霊と御力の現われでした。」と言いました。御霊が働かれたら、今までは絶対にそんなことはできないと思っていた

ことも、キリストの命令に従うがゆえにすることができるし、今までこの習慣だけは捨てることはできないとしていたものも、神の悲しまれる罪だということで、それを捨てる勇気が与えられます。神の御霊の現われが、今ここにあるのだという信仰が、私たちにどれだけあるでしょうか？

そうではなく、かつて初代教会の人々が御霊の導きと現われを持っていたようにないから、と言って、「その著しい働きはその時代だけのものなのだ。」と教える教えがあります。その時は、癒しについては医療技術が足りなかったから癒しの賜物が必要だったのだ。昔は、聖書研究や神学研究がなかったから、預言や幻を見る働きが必要だったのだ。今は、数々の研究がなされており、だから、その必要はなくなった。今は、援助団体や福祉の機関がしっかりしているから、キリスト者が慈善の行いをする余地はほとんどなくなった、であるとか。そして何よりも、罪だと言われているものは実は生まれた環境があって、その生まれ育ちによって形作られたものなのだから、それを変えよということではなく、そのまま多様性の中で受け入れるのです、という教えもありますね。

けれども、初代教会で見ることのできたものが、今は見ないということが、神の御霊がそのように制限されたからなののでしょうか？いいえ、制限しているのは私たち人間のほうです。私たちが、神の御霊の力、人を罪から解き放つ力に対する信仰を失っているからではないのでしょうか？今日、こんなに医療が発達しても、また新たな形でいろいろな病が出てきて、留まることを知りません。今日、世界でいろんなことが起こっていますが、これまでの研究でそれを説明できているのでしょうか？援助団体や福祉制度によって、人々の飢え渴いているもの、すなわちその物質的な援助以上に、枯渇している愛を満たすことができるのでしょうか？英国の説教者スポルジョンは、こう言いました。「主のもとへ戻ろう。聖霊と火のバプテスマを求めて、主のすばらしい御業を再び見ようではありませんか。」

3B 「主の御業」と言われるもの

人を救うことのできる神の力である福音に制限がかけられたものではありません。私たちが、福音の力を信じないで、他の何か人々に魅力あるもので引き付けようとしてしまいます。世の誤りを認めさせるのが聖霊の働きなのに、自分に耳障りのよいことを言ってもらう説教者や教師を求めて、自分の願っていることを言ってくれるのが真実な教師で、嫌なことを言う人は間違った教師だとしていないのでしょうか？

ミカはここで、「これは主のみわざだろうか。」と言っています。今、起こっていることについて、「このままでいいのだ」と合わせるのが主の御業ではないはず。私たちは圧倒的に、今、自分の周りで起こっていることについて無力感を抱きますし、自分たちが宣べ伝えている福音がどこまで影響力を与えているのか分かっていません。それが大海の一滴のように感じるかもしれません。しかし、預言者ゼカリヤが言いました。「4:6「権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって。」と万軍の主は仰せられる。」主は必ず、小さなところからご自分の働きをされます。愚かだと思われるところから、働きをされます。それは神の恵みだからです。受けるに値しない祝福を与え

たいと願われているからです。主イエス・キリストの名にある力を信じます。

3A 正しく歩む者への益 7

そしてミカは言いました。「**私のことばは、正しく歩む者に益とならないだろうか。**」そうです、彼らが自分たちの罪から悔い改め、主に立ち返るのであれば、必ず益になる言葉なのです。私たちはミカ書で学びますが、ユダの王ヒゼキヤは、ミカの預言を読んで、それで心を痛めて悔い改めました。そして、エルサレムが滅ぼされるという出来事は、ヒゼキヤの時代に見ることはありませんでした。正しく歩む者に、益となるのです。

どんなことが起こっても、神のことばがどんなに自分を窮屈にしているように見えたとしても、必ず益となるのです。私たちはどうしても、自分の思いや願いで、神がはっきりと言われていることを、そのまま受け入れずにそれを制御しようとしています。しかし、自分に不都合なことであっても、理解ができなくても、そのまま信じる時に、主は必ずやご自分の御霊によって私たちに、広い道、自由な道を歩ませてくださいます。「詩篇 119:96 私は、すべての全きものにも、終わりのあることを見ました。しかし、あなたの仰せは、すばらしく広いのです。」これこそが全きものだと思われているものが、終わりに近づいている時代に今、私たちは生きています。いろいろなものが、頭打ちに來ています。けれども、主の仰せ、主が命じられていることは、すばらしく広いのです。